

## 5月第1週の礼拝 説教

- 日 時：2022年5月1日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「初めに」
- 聖 書：ヨハネによる福音書 第1章1節-5節

立川教会では、最近まで、マルコによる福音書を学んでいたと聞いています。マルコによる福音書は、主イエスの約束により聖霊の力強い働きに励まされて歩んできた最初の頃の教会が40年近くを経て来た西暦の70年ごろに、その地の強大な支配者であるローマ帝国に迫害されて危急存亡の時を迎え、教会はどこに立つのか、さらに言い換えれば、神の子イエス・キリストを信じる者たちはどこに立つのか、ということを探り出すを得なかったがゆえに、書物として書き残されたと言われていています。四つの福音書の中では最初に書かれたと言われていています。そして、先ほど読んでいただいたヨハネによる福音書は、マルコによる福音書が書かれてから20年ぐらいたった西暦の90年頃に、4つの福音書の中では最後に書かれたと言われていています。ところが、興味深いことにマルコによる福音書は「神の子イエス・キリストの福音の初め」と書き出されており、元の言葉の順序通りに訳しますと、「初め 福音の イエスキリストの 神の子」となります。そして、ヨハネによる福音書は「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」と書き出されています。ヨハネによる福音書には冒頭に前置詞（英語でいえばin）があるのですが、やはり「初め」という言葉を用いて書き出しています。さらに、ヨハネによる福音書が、その書き方を参考にしている旧約聖書の創世記1章1節も、『七十人訳』という聖書を見ますと「初めに」という書き出しになっているのです。それらのことを意識して3つの聖書箇所を比較してみますと、最初の頃の教会が、神様の力にどれほどの信頼と恐れをもって「神の子イエス・キリスト」を告白したかという重みが伝わって来るようです。そして、その単純で力強い信仰の告白は、最初に書かれたマルコによる福音書から一貫して最後に書かれたと言われるヨハネによる福音書に至るまで、確かに受け継がれていると深く思われるのです。そして、「ヨハネによる福音書」が創世記の冒頭の書き出しを背景にして書き出すことにより、天地を創造された神様のひとり子であるイエス・キリストの福音を是非知ってほしい、その力に多くの人々が与ってほしい、という福音書の著者たちに共通する願いがひしひしと感じられるように思います。

なぜ、そのような思いになったかという、聖書というのは、どの書物を取りましても、世の中が平和で人々が満たされて生活し、主なる神様を信じる者は自由にそのことを

告白し礼拝することができるという状況で書かれたとは言えないことにかつて学んだことがあったからです。「ヨハネによる福音書」にしても「創世記」にしても、その背景には、主なる神様を信じて生きた人々の絶望やうめき、さらには、この世界や歴史の中に主なる神様などおられないのではないか、という虚無感などがあるとされています。しかし、そこから、「いや、そうではない。確かに、私たちを生かしてくださっている主なる神さまがおられる」と確信した人々があり、その信仰を告白して記したことにより聖書として残ったのです。

翻って、私自身の信仰生活の歩みを振り返りますと、よくここまで滅びないで主イエスにつながってこられたな、という思いがいたします。しかしそれと同時に、私のような者がつながってこられたのだから、どなたもつながり続けられるはずだ、と主イエスの招きの力の確かさを確信させられております。だからこそ、そのような私を生かしてくださる主イエスのみ言葉を、拙い言葉ではあってもなんとか多くの方にお伝えし、共に主イエスの恵みに与りたいと願っているのです。

さて、今日の礼拝で、皆様と共に聴きたい聖書の御言葉は、先ほど読んでいただきましたヨハネによる福音書1章1節から5節です。「キリスト教とは初めと終わりがはっきりと示されている宗教である。しかも、終わりから初めを見るという歴史観に立っている。」というのは、私が信仰を与えられたころに、母教会の牧師から叩き込まれた考え方です。聖書66巻の書き出しが「初めに」という御言葉であることを深く思うとき、「天地すべてが神様によって創造されたのだからすべての事柄の筋道が明らかである」ということを考えさせられます。ヨハネによる福音書ではそのような事柄の筋道を「言（ロゴス）」と記しています。ですから、「筋道が明らかであるならば、私たちを不安に陥れ根底から揺るがすものは何もないはずだ。」という不思議な安心感が湧きあがってまいります。

ところで、ヨハネによる福音書もまた、決して平穏な状況で書かれたものではありません。20章30から31節には「本書の目的」という見出しがあり、31節には「これらのことが書かれたのは、あなたがたがイエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」と述べられています。言い換えれば、ヨハネによる福音書の背景には、主イエスを神の子メシアであると信じそのように告白することが困難な状況があったがゆえに、あえて、福音書を書く目的が明確に記されているとも言えるのです。そして、そのような困難な状況であるからこそ、ヨハネによる福

音書の著者は、当時のユダヤ教の信仰を踏まえながら、創世記の天地創造物語を意識して、創世記と同様に「初めに」と書き出している、と考えられるのです。そして、言によって万物が創造されていると宣言し、その言こそ、「命であり、光である」というのです。1節では3回「言」と繰り返されています。そのように考えてまいりますと、ヨハネによる福音書1章1節から5節で今の私たちにも問われているのは、私たちが本当に「ロゴス」なる神として、主イエスを信じているか、ということになるでしょう。言い換えれば、この全世界の成り立ちの最初からおられ、歴史を支配し、今も後も世界を支配する力をその御言葉の中にお持ちになっておられる主イエスが、御言葉を持って今この時も私たちに親しく臨んでおられることを信じているのか、ということになります。

ヨハネによる福音書には、15章16節に有名な御言葉があります。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。」私たちは誰一人として神様の「言」すなわち、主イエスの招きなくしてはキリスト者となることはできないし、そもそも、人としてこの世に生を受けることもありえなかった、とも言えるでしょう。そのことを私たちは深く心に刻みながら、「初めに神と共にあった」主イエスを、今日もまた私たちの救い主と告白してまいりましょう。